# 在りし日の歌

亡き児文也の霊に捧ぐ

中原中也

# 在りし日の歌

# 含羞（はぢらひ）

――在りし日の歌――

なにゆゑに　こゝろかくは羞（は）ぢらふ
秋　風白き日の山かげなりき
椎の枯葉の落窪に

幹々は　いやにおとなび彳ちゐたり
枝々の　拱みあはすあたりかなしげの
空は死児等の亡霊にみち　まばたきぬ
をりしもかなた野のうへは
**あすとらかん**のあはひ縫ふ　古代の象の夢なりき

椎の枯葉の落窪に
幹々は　いやにおとなび彳ちゐたり
その日　その幹の隙　睦みし瞳
姉らしき色　きみはありにし

その日　その幹の隙（ひま）　睦みし瞳
姉らしき色　きみはありにし
あゝ！　過ぎし日の　仄燃（ほの）えあざやぐをりをりは
わが心　なにゆゑに　なにゆゑにかくは羞ぢらふ
……

# むなしさ

臘祭(らふさい)の夜の　巷(ちまた)に堕(お)ちて
心臓はも　条網に絡(から)み
脂(あぶら)ぎる　胸乳(むなち)も露(あら)は
よすがなき　われは戯女(たはれめ)

せつなきに　泣きも得せずて
この日頃　闇を孕(はら)めり
遐(とほ)き空　線条に鳴る
海峡岸　冬の暁風

白薔薇(しろばら)の　造化の花瓣(くわべん)
凍(い)てつきて　心もあらず
明けき日の　乙女の集(つど)ひ
それらみな　ふるのわが友

偏菱形(へんりようけい)＝聚接面(しゆうせつめん)そも

胡弓の音　つづきてきこゆ

# 夜更の雨

――ヹルレーヌの面影――

雨は　今宵も　昔　ながらに、
昔　ながらの　唄を　うたつてる。
だらだら　だらだら　しつこい　程だ。

と、見るヹル氏の　あの図体（づうたい）が、
倉庫の　間の　路次を　ゆくのだ。
倉庫の　間にや　護謨合羽（かっぱ）の　反射（ひかり）だ。
　それから　泥炭の　しみたれた　巫戯（ふざ）けだ。
さてこの　路次を　抜けさへ　したらば、
　抜けさへ　したらと　ほのかな　のぞみだ……
……
いやはや　のぞみにや　相違も　あるまい？
自動車　なんぞに　用事は　ないぞ、

あかるい　外燈(ひ)なぞは　なほの　ことだ。
酒場の　軒燈(あかり)の　腐つた　眼玉よ、
遐(とほ)くの　方では　舎密(せいみ)も　鳴つてる。

# 早春の風

けふ一日(ひとひ)また金の風
大きい風には銀の鈴
けふ一日また金の風

女王の冠さながらに

卓(たく)の前には腰を掛け
かびろき窓にむかひます

外吹く風は金の風
大きい風には銀の鈴
けふ一日また金の風

枯草の音のかなしくて
煙は空に身をすさび
日影たのしく身を嫋(なよ)ぶ

鳶色(とびいろ)の土かをるれば
物干竿は空に往き
登る坂道なごめども

青き女(をみな)の顎(あぎと)かと
岡に梢のとげとげし
今日一日また金の風……

# 月

今宵月は蘘荷(めうが)を食ひ過ぎてゐる
済製場(さいせいば)の屋根にブラ下つた琵琶(びは)は鳴るとしも想へぬ
石炭の匂ひがしたつて怖(おぢ)けるには及ばぬ
灌木がその個性を砥(と)いでゐる

姉妹は眠つた、　母親は紅殻色（べんがらいろ）の格子を締めた！

さてベランダの上にだが
見れば銅貨が落ちてゐる、　いやメダルなのかア
これは今日昼落とした文子さんのだ
明日はこれを届けてやらう
ポケットに入れたが気にかゝる、　月は蘘荷を食ひ
過ぎてゐる
灌木がその個性を砥（と）いでゐる
姉妹は眠つた、　母親は紅殻色の格子を締めた！

青い瞳

# 1　夏の朝

かなしい心に夜が明けた、

うれしい心に夜が明けた、
いいや、これはどうしたといふのだ？
さてもかなしい夜の明けだ！

青い瞳は動かなかつた、
世界はまだみな眠つてゐた、
さうして『その時』は過ぎつつあつた、
あゝ、遐（とほ）い遐いい話。

青い瞳は動かなかつた、
——いまは動いてゐるかもしれない……

青い瞳は動かなかつた、
いたいたしくて美しかつた！
私はいまは此処(ここ)にゐる、黄色い灯影に。
あれからどうなつたのかしらない……
あゝ、『あの時』はあゝして過ぎつゝあつた！
碧(あを)い、噴き出す蒸気のやうに。

## 2　冬の朝

それからそれがどうなつたのか……
それは僕には分らなかつた
とにかく朝霧罩(こ)めた飛行場から
機影はもう永遠に消え去つてゐた。
あとには残酷な砂礫(されき)だの、雑草だの
頬を裂(き)るやうな寒さが残つた。
——こんな残酷な空寞(くうばく)たる朝にも猶(なほ)
人は人に笑顔を以て対さねばならないとは
なんとも情ないことに思はれるのだつたが
それなのに其処(そこ)でもまた

笑ひを沢山湛(たた)へた者ほど
優越を感じてゐるのであつた。
陽は霧に光り、草葉の霜は解け、
遠くの民家に鶏(とり)は鳴いたが、
霧も光も霜も鶏も
みんな人々の心には沁(し)まず、
人々は家に帰つて食卓についた。
　　（飛行機に残つたのは僕、
　バットの空箱(から)を蹴つてみる）

## 三歳の記憶

縁側に陽があたつてて、
樹脂(きやに)が五彩に眠る時、
柿の木いつぽんある中庭(には)は、
土は枇杷(びは)いろ　蠅(はへ)が唸(な)く。

稚厠(おかは)の上に　抱へられてた、
すると尻から　蛔虫(むし)が下がつた。
その蛔虫が、稚厠の浅瀬で動くので
動くので、私は吃驚(びつくり)しちまつた。

あゝあ、ほんとに怖かつた
なんだか不思議に怖かつた、
それでわたしはひとしきり
ひと泣き泣いて　やつたんだ。

あゝ、怖かつた怖かつた

――部屋の中は　ひつそりしてゐて、
隣家(となり)は空に　舞ひ去つてゐた！
隣家は空に　舞ひ去つてゐた！

# 六月の雨

またひとしきり　午前の雨が
菖蒲(しやうぶ)のいろの　みどりいろ
眼(まなこ)うるめる　面長き女(ひと)
たちあらはれて　消えてゆく

たちあらはれて　消えゆけば
うれひに沈み　しとしとと
畠(はたけ)の上に　落ちてゐる
はてしもしれず　落ちてゐる

お太鼓(たいこ)叩いて　笛吹いて
あどけない子が　日曜日
畳の上で　遊びます

お太鼓叩いて　笛吹いて
遊んでゐれば　雨が降る

櫺子（れんじ）の外に　雨が降る

# 雨の日

通りに雨は降りしきり、
家々の腰板古い。
もろもろの愚弄の眼(まなこ)は淑(しと)やかとなり、
わたくしは、花瓣(くわべん)の夢をみながら目を覚ます。

＊

鳶色（とびいろ）の古刀の鞘（さや）よ、
舌あまりの幼な友達、
おまへの額は四角張つてた。
わたしはおまへを思ひ出す。

＊

鑢（やすり）の音よ、　だみ声よ、
老い疲れたる胃袋よ、

雨の中にはとほく聞け、
やさしいやさしい唇を。

*

煉瓦の色の憔心(せうしん)の
見え匿(かく)れする雨の空。
賢(さかし)い少女の黒髪と、
慈父の首(かうべ)と懐かしい……

# 春

春は土と草とに新しい汗をかゝせる。
その汗を乾かさうと、雲雀は空に騰（あが）る。
瓦屋根今朝不平がない、
長い校舎から合唱は空にあがる。

あゝ、しづかだしづかだ。
めぐり来た、これが今年の私の春だ。
むかし私の胸摶(う)つた希望は今日を、
厳(いか)めしい紺青(こあを)となつて空から私に降りかゝる。

そして私は呆気(ほうけ)てしまふ、バカになつてしまふ
——薮かげの、小川か銀か小波(さざなみ)か？
薮かげの小川か銀か小波か？

大きい猫が頸ふりむけてぶきつちよに
一つの鈴をころばしてゐる、

一つの鈴を、ころばして見てゐる。

# 春の日の歌

流（ながれ）よ、淡（あは）き　嬌羞（けうしう）よ、
ながれて　ゆくか　空の国？
心も　とほく　散らかりて、
エヂプト煙草　たちまよふ。

流よ、冷たき　憂ひ秘め、
ながれて　ゆくか　麓までも？
まだみぬ　顔の　不可思議の
咽喉（のんど）の　みえる　あたりまで……

午睡の　夢の　ふくよかに、
野原の　空の　空のうへ？
うわあ　うわあと　涕（な）くなるか

黄色い　納屋や、白の倉、
水車の　みえる　彼方（かなた）まで、

ながれ　ながれて　ゆくなるか？

# 夏の夜

あゝ　疲れた胸の裡(うち)を
桜色の　女が通る
女が通る。
夏の夜の水田(すいでん)の滓(おり)、

怨恨は気が遐(とほ)くなる
——盆地を繞(めぐ)る山は巡るか？

裸足(らそく)はやさしく　砂は底だ、
開いた瞳は　おいてきぼりだ、
霧の夜空は　高くて黒い。

霧の夜空は高くて黒い、
親の慈愛はどうしやうもない、
——疲れた胸の裡を　花瓣(くわべん)が通る。

疲れた胸の裡を　花瓣が通る
ときどき銅鑼（ごんぐ）が著物に触れて。
靄（もや）はきれいだけれども、暑い！

# 幼獣の歌

黒い夜草深い野にあつて、
一匹の獣（けもの）が火消壺（ひけしつぼ）の中で
燧石（ひうちいし）を打つて、星を作つた。
冬を混ぜる　風が鳴つて。

獣はもはや、なんにも見なかつた。
カスタニェットと月光のほか
目覚ますことなき星を抱いて、
壺の中には冒瀆を迎へて。

雨後らしく思ひ出は一塊(いつくわい)となつて
風と肩を組み、波を打つた。
あゝ　なまめかしい物語――
奴隷も王女と美しかれよ。

卵殻もどきの貴公子の微笑と

遅鈍な子供の白血球とは、
それな獣を怖がらす。

黒い夜草深い野の中で、
一匹の獣の心は燻(くすぶ)る。
黒い夜草深い野の中で——
太古(むかし)は、独語も美しかった！……

## この小児

コボルト空に往交（ゆきか）へば、
野に
蒼白の
この小児。

黒雲空にすぢ引けば、
この小児
搾(しぼ)る涙は
銀の液……

地球が二つに割れゝばいい、
そして片方は洋行すればいい、
すれば私はもう片方に腰掛けて
青空をばかり——

花崗の巌(いはほ)や

浜の空
み寺の屋根や
海の果て……

# 冬の日の記憶

昼、寒い風の中で雀を手にとつて愛してゐた子供
が、
夜になつて、急に死んだ。
次の朝は霜が降つた。

その子の兄が電報打ちに行つた。
夜になつても、母親は泣いた。
父親は、遠洋航海してゐた。

雀はどうなつたか、誰も知らなかつた。
北風は往還を白くしてゐた。

つるべの音が偶々(たまたま)した時、
父親からの、返電が来た。

毎日々々霜が降つた。
遠洋航海からはまだ帰れまい。
その後母親がどうしてゐるか……
電報打つた兄は、今日学校で叱られた。

# 秋の日

磧(かはら)づたひの　竝樹(なみき)の　蔭に
秋は　美し　女の　瞼(まぶた)
泣きも　いでなん　空の　潤(うる)み
昔の　馬の　蹄(ひづめ)の　音よ

長の　年月　疲れの　ために
国道　いゆけば　秋は　身に沁む
なんでも　ないてば　なんでも　ないに
木履（ぼくり）の　音さへ　身に沁みる

陽は今　磧の　半分に　射し
流れを　無形（むぎやう）の　筏（いかだ）は　とほる
野原は　向ふで　伏せつて　ゐるが

連れだつ　友の　お道化（どけ）た　調子も
不思議に　空気に　溶け　込んで

秋は　案じる　くちびる　結んで

# 冷たい夜

冬の夜に
私の心が悲しんでゐる
悲しんでゐる、わけもなく……
心は錆びて、紫色をしてゐる。

丈夫な扉の向ふに、
古い日は放心してゐる。
丘の上では
棉の実が罅裂（はじ）ける。

此処（ここ）では薪が燻（くすぶ）つてゐる、
その煙は、自分自らを
知つてでもゐるやうにのぼる。

誘はれるでもなく
覓（もと）めるでもなく、

私の心が燻る……

# 冬の明け方

残んの雪が瓦に少なく固く
枯木の小枝が鹿のやうに睡（ねむ）い、
冬の朝の六時
私の頭も睡い。

鳥が啼いて通る――
庭の地面も鹿のやうに睡い。
――林が逃げた農家が逃げた、
空は悲しい衰弱。
　　私の心は悲しい……

やがて薄日が射し
青空が開(あ)く。
上の上の空でジュピター神の砲(ひづつ)が鳴る。
――四方(よも)の山が沈み、

農家の庭が欠伸（あくび）をし、
道は空へと挨拶する。
私の心は悲しい……

老いたる者をして

――「空しき秋」第十二

老いたる者をして静謐（せいひつ）の裡（うち）にあらしめよ
そは彼等こころゆくまで悔いんためなり

吾は悔いんことを欲す
こころゆくまで悔ゆるは洵（まこと）に魂を休むればなり
あゝ　はてしもなく涕（な）かんことこそ望ましけれ
父も母も兄弟（はらから）も友も、はた見知らざる人々をも忘
れて
東明（しののめ）の空の如く丘々をわたりゆく夕べの風の如く
**はたなび**く小旗の如く涕かんかな
或（ある）はまた別れの言葉の、こだまし、雲に入り、野

末にひびき
海の上(へ)の風にまじりてとことはに過ぎゆく如く…
…

反歌

あゝ　吾等怯懦(けふだ)のために長き間、いとも長き間
徒(あだ)なることにかゝらひて、涕くことを忘れゐたり
しよ、げに忘れゐたりしよ……

〔空しき秋二十数篇は散佚して今はな

し。

その第十二のみ、諸井

三郎の作曲によりて残りしものなり。〕

## 湖上

ポッカリ月が出ましたら、
舟を浮べて出掛けませう。
波はヒタヒタ打つでせう、
風も少しはあるでせう。

沖に出たらば暗いでせう、
櫂(かい)から滴垂(したた)る水の音は
昵懇(ちか)しいものに聞こえませう、
――あなたの言葉の杜切(とぎ)れ間を。

月は聴き耳立てるでせう、
すこしは降りても来るでせう、
われら接唇(くちづけ)する時に
月は頭上にあるでせう。

あなたはなほも、 語るでせう、

よしないことや拗言（すねごと）や、
洩らさず私は聴くでせう、
――けれど漕ぐ手はやめないで。

ポッカリ月が出ましたら、
舟を浮べて出掛けませう、
波はヒタヒタ打つでせう、
風も少しはあるでせう。

# 冬の夜

みなさん今夜は静かです
薬罐（やくわん）の音がしてゐます
僕は女を想つてる
僕には女がないのです

それで苦労もないのです
えもいはれない弾力の
空気のやうな空想に
女を描いてみてゐるのです

えもいはれない弾力の
澄み亙(わた)つたる夜の沈黙(しじま)
薬罐の音を聞きながら
女を夢みてゐるのです

かくて夜は更(ふ)け夜は深まつて

犬のみ覚めたる冬の夜は
影と煙草と僕と犬
えもいはれないカクテールです

2

空気よりよいものはないのです
それも寒い夜の室内の空気よりもよいものはない
のです

煙よりよいものはないのです
煙より　愉快なものもないのです
やがてはそれがお分りなのです
同感なさる時が　来るのです

空気よりよいものはないのです
寒い夜の痩せた年増(としま)女の手のやうな
その手の弾力のやうな　やはらかい　またかたい
かたいやうな　その手の弾力のやうな
煙のやうな　その女の情熱のやうな
炎(も)えるやうな　消えるやうな

冬の夜の室内の　空気よりよいものはないのです

# 秋の消息

麻は朝、人の肌（はだへ）に追い縋（すが）り
雀らの、声も硬うはなりました
煙突の、煙は風に乱れ散り
火山灰掘れば氷のある如く

けざやけき顥気（かうき）の底に青空は
冷たく沈み、しみじみと

教会堂の石段に
日向ぼつこをしてあれば
陽光（ひかり）に廻（めぐ）る花々や
物蔭に、すずろすだける虫の音（ね）や

秋の日は、からだに暖か
手や足に、ひえびえとして
此の日頃、広告気球は新宿の

空に揚りて漂へり

# 骨

ホラホラ、これが僕の骨だ、
生きてゐた時の苦労にみちた
あのけがらはしい肉を破つて、
しらじらと雨に洗はれ、
ヌックと出た、骨の尖（さき）。

それは光沢もない、
ただいたづらにしらじらと、
雨を吸収する、
風に吹かれる、
幾分空を反映する。

生きてゐた時に、
これが食堂の雑踏の中に、
坐つてゐたこともある、
みつばのおしたしを食つたこともある、

と思へばなんとも可笑(をか)しい。

ホラホラ、これが僕の骨――
見てゐるのは僕？　可笑しなことだ。
霊魂はあとに残つて、
また骨の処にやつて来て、
見てゐるのかしら？

故郷(ふるさと)の小川のへりに、
半ばは枯れた草に立つて、
見てゐるのは、――僕？

恰度（ちやうど）立札ほどの高さに、
骨はしらじらととんがつてゐる。

# 秋日狂乱

僕にはもはや何もないのだ
僕は空手空拳だ
おまけにそれを嘆きもしない
僕はいよいよの無一物だ

それにしても今日は好いお天気で
さつきから沢山の飛行機が飛んでゐる
――欧羅巴(ヨーロッパ)は戦争を起すのか起さないのか
誰がそんなこと分るものか

今日はほんとに好いお天気で
空の青も涙にうるんでゐる
ポプラがヒラヒラヒラヒラしてゐて
子供等は先刻(せんこく)昇天した

もはや地上には日向ぼつこをしてゐる

月給取の妻君とデーデー屋さん以外にゐない
デーデー屋さんの叩く鼓の音が
明るい廃墟を唯独りで讃美し廻つてゐる

あゝ、 誰か来て僕を助けて呉れ
ヂオゲネスの頃には小鳥くらゐ啼いたらうが
けふびは雀も啼いてはをらぬ
地上に落ちた物影でさへ、 はや余りに淡(あは)い！

——さるにても田舎のお嬢さんは何処(どこ)に去(い)つたか
その紫の押花(おしばな)はもうにじまないのか

草の上には陽は照らぬのか
昇天の幻想だにもはやないのか？

僕は何を云つてゐるのか
如何（いか）なる錯乱に掠（かす）められてゐるのか
蝶々はどつちへとんでいつたか
今は春でなくて、　秋であつたか

ではあゝ、　濃いシロップでも飲まう
冷たくして、　太いストローで飲まう
とろとろと、　脇見もしないで飲まう

何にも、何にも、求めまい！……

# 朝鮮女

朝鮮女（をんな）の服の紐
秋の風にや縒（よ）れたらん
街道を往くをりをりは
子供の手をば無理に引き
額顰（しか）めし汝（な）が面（おも）ぞ

肌赤銅の乾物(ひもの)にて
なにを思へるその顔ぞ
——まことやわれもうらぶれし
こころに呆(ほう)け見ゐたりけむ
われを打見ていぶかりて
子供うながし去りゆけり……
軽く立ちたる 埃(ほこり) かも
何をかわれに思へとや
軽く立ちたる埃かも
何をかわれに思へとや……
・・・・・・・・・・・

## 夏の夜に覚めてみた夢

眠らうとして目をば閉ぢると
真ッ暗なグランドの上に
その日昼みた野球のナインの
ユニホームばかりほのかに白く——

ナインは各々守備位置にあり
狡（ずる）さうなピッチャは相も変らず
お調子者のセカンドは
相も変らぬお調子ぶりの

扨（さて）、待つてゐるヒットは出なく
やれやれと思つてゐると
ナインも打者も　悉（ことごと）く消え
人ッ子一人ゐはしないグランドは
忽（たちま）ち暑い真昼（ひる）のグランド

グランド繞(めぐ)るポプラ竝木(なみき)は
蒼々として葉をひるがへし
ひときはつづく蟬しぐれ
やれやれと思つてゐるうち……眠(ね)た

## 春と赤ン坊

菜の花畑で眠つてゐるのは……
菜の花畑で吹かれてゐるのは……
赤ン坊ではないでせうか？

いいえ、空で鳴るのは、電線です電線です

ひねもす、空で鳴るのは、あれは電線です
菜の花畑に眠つてゐるのは、赤ン坊ですけど

走つてゆくのは、自転車々々々
向ふの道を、走つてゆくのは
薄桃色の、風を切つて……

薄桃色の、風を切つて
走つてゆくのは菜の花畑や空の白雲（しろくも）
——赤ン坊を畑に置いて

# 雲雀

ひねもす空で鳴りますは
あゝ　電線だ、電線だ
ひねもす空で啼きますは
あゝ　雲の子だ、雲雀奴(ひばりめ)だ

碧（あーを）い　碧（あーを）い空の中
ぐるぐるぐると　潜（もぐ）りこみ
ピーチクチクと啼きますは
あゝ　雲の子だ、雲雀奴だ

歩いてゆくのは菜の花畑
地平の方へ、地平の方へ
歩いてゆくのはあの山この山
あーをい　あーをい空の下

眠つてゐるのは、菜の花畑に
菜の花畑に、眠つてゐるのは
菜の花畑で風に吹かれて
眠つてゐるのは赤ン坊だ？

# 初夏の夜

また今年（こんねん）も夏が来て、
夜は、蒸気で出来た白熊が、
沼をわたつてやつてくる。
——色々のことがあつたんです。
色々のことをして来たものです。

嬉しいことも、あつたのですが、
回想されては、すべてがかなしい
鉄製の、軋音（あつおん）さながら
なべては夕暮迫るけはひに
幼年も、老年も、青年も壮年も、
共々に余りに可憐な声をばあげて、
薄暮の中で舞ふ蛾の下で
はかなくも可憐な顎（あご）をしてゐるのです。
されば今夜（こんや）六月の良夜（あたらよ）なりとはいへ、
遠いい物音が、心地よく風に送られて来るとはいへ、

なにがなし悲しい思ひであるのは、
消えたばかしの鉄橋の響音、
大河（おおかは）の、その鉄橋の上方に、空はぼんやりと石盤
色であるのです。

# 北の海

海にゐるのは、
あれは人魚ではないのです。
海にゐるのは、
あれは、浪ばかり。

曇つた北海の空の下、
浪はところどころ歯をむいて、
空を呪（のろ）つてゐるのです。
いつはてるとも知れない呪。

海にゐるのは、
あれは人魚ではないのです。
海にゐるのは、
あれは、浪ばかり。

# 頑是ない歌

思へば遠く来たもんだ
十二の冬のあの夕べ
港の空に鳴り響いた
汽笛の湯気（ゆげ）は今いづこ

雲の間に月はゐて
それな汽笛を耳にすると
竦然（しょうぜん）として身をすくめ
月はその時空にゐた

それから何年経つたことか
汽笛の湯気を茫然と
眼で追ひかなしくなつてゐた
あの頃の俺はいまいづこ

今では女房子供持ち

思へば遠く来たもんだ
此の先まだまだ何時までか
生きてゆくのであらうけど

生きてゆくのであらうけど
遠く経て来た日や夜(よる)の
あんまりこんなにこひしゆては
なんだか自信が持てないよ

さりとて生きてゆく限り
結局我(が)ン張る僕の性質(さが)

と思へばなんだか我ながら
いたはしいよなものですよ

考へてみればそれはまぁ
結局我ン張るのだとして
昔恋しい時もあり　そして
どうにかやつてはゆくのでせう

考へてみれば簡単だ
畢竟(ひつきやう) 意志の問題だ
なんとかやるより仕方もない

やりさへすればよいのだと
思ふけれどもそれもそれ
十二の冬のあの夕べ
港の空に鳴り響いた
汽笛の湯気や今いづこ

# 閑寂

なんにも訪ふことのない、
私の心は閑寂だ。
それは日曜日の渡り廊下、
——みんなは野原へ行つちやつた。

板は冷たい光沢(つや)をもち、
小鳥は庭に啼(な)いてゐる。
　締めの足りない水道の、
　蛇口の滴(しづく)は、つと光り！

土は薔薇色(ばらいろ)、空には雲雀(ひばり)
空はきれいな四月です。
　なんにも訪(おとな)ふことのない、
　私の心は閑寂だ。

## お道化うた

月の光のそのことを、
盲目少女（めくらむすめ）に教へたは、
ベートーゼンか、シューバート？
俺の記憶の錯覚が、
今夜とちれてゐるけれど、

ベトちやんだとは思ふけど、
シュバちやんではなかつたらうか？

霧の降つたる秋の夜に、
庭・石段に腰掛けて、
月の光を浴びながら、
二人、黙つてゐたけれど、
やがてピアノの部屋に入り、
泣かんばかりに弾き出した、
あれは、シュバちやんではなかつたらうか？

かすむ街の灯とほに見て、
ウヰンの市（まち）の郊外に、
星も降るよなその夜さ一と夜、
虫、草叢（くさむら）にすだく頃、
教師の息子の十三番目、
頸の短いあの男、
盲目少女（めくらむすめ）の手をとるやうに、
ピアノの上に勢ひ込んだ、
汗の出さうなその額、
安物くさいその眼鏡、
丸い背中もいぢらしく

吐き出すやうに弾いたのは、
あれは、シュバちやんではなかつたらうか？

シュバちやんかベトちやんか、
そんなこと、いざ知らね、
今宵星降る東京の夜（よる）、
ビールのコップを傾けて、
月の光を見てあれば、

ベトちやんもシュバちやんも、はやとほに死に、
はやとほに死んだことさへ、

誰知らうこともない……

## 思ひ出

お天気の日の、海の沖は
なんと、あんなに綺麗なんだ！
お天気の日の、海の沖は
まるで、金や、銀ではないか

金や銀の沖の波に、
ひかれひかれて、岬（みさき）の端に
やつて来たれど金や銀は
なほもとほのき、沖で光つた。

岬の端には煉瓦工場が、
工場の庭には煉瓦干されて、
煉瓦干されて赫々（あかあか）してゐた
しかも工場は、音とてなかつた

煉瓦工場に、腰をば据ゑて、

私は暫く煙草を吹かした。
煙草吹かしてぼんやりしてると、
沖の方では波が鳴つてた。

沖の方では波が鳴らうと、
私はかまはずぼんやりしてゐた。
ぼんやりしてると頭も胸も
ポカポカポカポカ暖かだつた

ポカポカポカポカ暖かだつたよ
岬の工場は春の陽をうけ、

煉瓦工場は音とてもなく
裏の木立で鳥が啼（な）いてた

鳥が啼いても煉瓦工場は、
ビクともしないでジッとしてゐた
鳥が啼いても煉瓦工場の、
窓の硝子は陽をうけてゐた

窓の硝子は陽をうけてても
ちつとも暖かさうではなかつた
春のはじめのお天気の日の

岬の端の煉瓦工場よ！

*

煉瓦工場は、その後廃（すた）れて、
煉瓦工場は、死んでしまつた
煉瓦工場の、窓も硝子（ガラス）も、
今は毀（こは）れてゐようといふもの

煉瓦工場は、　廃れて枯れて、
木立の前に、　今もぼんやり
木立に鳥は、　今も啼くけど
煉瓦工場は、　朽ちてゆくだけ

沖の波は、　今も鳴るけど
庭の土には、　陽が照るけれど
煉瓦工場に、　人夫は来ない
煉瓦工場に、　僕も行かない

嘗（かつ）て煙を、　吐いてた煙突も、

今はぶきみに、たゞ立つてゐる
雨の降る日は、殊にもぶきみ
晴れた日だとて、相当ぶきみ

相当ぶきみな、煙突でさへ
今ぢやどうさへ、手出しも出来ず
この尨大（ぼうだい）な、古強者（ふるつはもの）が
時々恨む、その眼は怖い

その眼は怖くて、今日も僕は
浜へ出て来て、石に腰掛け

ぼんやり俯(うつむ)き、案じてゐれば
僕の胸さへ、波を打つのだ

## 残暑

畳の上に、寝ころばう、
蠅（はへ）はブンブン　唸つてる
畳ももはや　黄色くなつたと
今朝がた　誰かが云つてゐたつけ

それやこれやと　とりとめもなく
僕の頭に　記憶は浮かび
浮かぶがまゝに　浮かべてゐるうち
いつしか　僕は眠つてゐたのだ

覚めたのは　夕方ちかく
まだ**かなかな**は　啼(な)いてたけれど
樹々の梢は　陽を受けてたけど、
僕は庭木に　打水やつた

打水が、樹々の下枝(しづえ)の葉の尖(さき)に

光つてゐるのをいつまでも、僕は見てゐた

# 除夜の鐘

除夜の鐘は暗い遠いい空で鳴る。
千万年も、古びた夜（よる）の空気を顫（ふる）はし、
除夜の鐘は暗い遠いい空で鳴る。

それは寺院の森の霧（きら）つた空……

そのあたりで鳴つて、そしてそこから響いて来る。
それは寺院の森の霧つた空……

その時子供は父母の膝下(ひざもと)で蕎麦(そば)を食うべ、
その時銀座はいつぱいの人出、浅草もいつぱいの人出、
その時子供は父母の膝下で蕎麦を食うべ。

その時銀座はいつぱいの人出、浅草もいつぱいの人出。
その時囚人は、どんな心持だらう、どんな心持だ

らう、
その時銀座はいつぱいの人出、浅草もいつぱいの
人出。

除夜の鐘は暗い遠いい空で鳴る。
千万年も、古びた夜（よる）の空気を顫（ふる）はし、
除夜の鐘は暗い遠いい空で鳴る。

# 雪の賦

雪が降るとこのわたくしには、人生が、
かなしくもうつくしいものに――
憂愁にみちたものに、思へるのであつた。

その雪は、中世の、暗いお城の塀にも降り、

大高源吾(おほたかげんご)の頃にも降つた……

幾多(あまた)々々の孤児の手は、
そのためにかじかんで、
都会の夕べはそのために十分悲しくあつたのだ。

ロシアの田舎の別荘の、
矢来の彼方(かなた)に見る雪は、
うんざりする程(ほど)永遠で、

雪の降る日は高貴の夫人も、

ちつとは愚痴でもあらうと思はれ……

雪が降るとこのわたくしには、人生が
かなしくもうつくしいものに――
憂愁にみちたものに、思へるのであつた。

# わが半生

私は随分苦労して来た。
それがどうした苦労であつたか、
語らうなぞとはつゆさへ思はぬ。
またその苦労が果して価値の
あつたものかなかつたものか、

そんなことなぞ考へてもみぬ。

とにかく私は苦労して来た。
苦労して来たことであつた！
そして、今、此処（ここ）、机の前の、
自分を見出すばつかりだ。
じつと手を出し眺めるほどの
ことしか私は出来ないのだ。

外（そと）では今宵（こよい）、木の葉がそよぐ。
はるかな気持の、春の宵だ。

そして私は、静かに死ぬる、
坐つたまんまで、死んでゆくのだ。

## 独身者

石鹸箱（せつけんばこ）には秋風が吹き
郊外と、市街を限る路の上には
大原女（おほはらめ）が一人歩いてゐた
——彼は独身者（どくしんもの）であつた

彼は極度の近眼であつた
彼はよそゆきを普段に着てゐた
判屋奉公したこともあつた

今しも彼が湯屋から出て来る
薄日の射してる午後の三時
石鹸箱には風が吹き
郊外と、 市街を限る路の上には
大原女が一人歩いてゐた

## 春宵感懐

雨が、あがつて、風が吹く。
雲が、流れる、月かくす。
みなさん、今夜は、春の宵。
なまあつたかい、風が吹く。

なんだか、深い、溜息が、
　なんだかはるかな、幻想が、
湧くけど、それは、摑（つか）めない。
　誰にも、それは、語れない。

誰にも、それは、語れない
　ことだけれども、それこそが、
いのちだらうぢやないですか、
　けれども、それは、示（あ）かせない……

かくて、人間、ひとりびとり、

こころで感じて、顔見合せれば
につこり笑ふといふほどの
ことして、一生、過ぎるんですねえ

雨が、あがつて、風が吹く。
雲が、流れる、月かくす。
みなさん、今夜は、春の宵。
なまあつたかい、風が吹く。

## 曇天

ある朝　僕は　空の　中に、
黒い　旗が　はためくを　見た。
はたはた　それは　はためいて　ゐたが、
音は　きこえぬ　高きが　ゆゑに。

手繰り　下ろさうと　僕は　したが、
綱も　なければ　それも　叶(かな)はず、
旗は　はたはた　はためく　ばかり、
空の　奥処(をくが)に　舞ひ入る　如く。

かかる　朝(あした)を　少年の　日も、
屢々(しばしば)　見たりと　僕は　憶(おも)ふ。
かの時は　そを　野原の　上に、
今はた　都会の　甍(いらか)の　上に。

かの時　この時　時は　隔つれ、

此処（ここ）と　彼処（かしこ）と　所は　異れ、
はたはた　はたはた　み空に　ひとり、
いまも　渝（かは）らぬ　かの　黒旗よ。

## 蜻蛉に寄す

あんまり晴れてる　秋の空
赤い蜻蛉（とんぼ）が　飛んでゐる
淡（あは）い夕陽を　浴びながら
僕は野原に　立つてゐる

遠くに工場の　煙突が
夕陽にかすんで　みえてゐる
大きな溜息　一つついて
僕は蹲(しやが)んで　石を拾ふ

その石くれの　冷たさが
漸く手中(しゆちゆう)で　ぬくもると
僕は放(ほか)して　今度は草を
夕陽を浴びてる　草を抜く

抜かれた草は　土の上で

ほのかほのかに　萎(な)えてゆく
遠くに工場の　煙突は
夕陽に霞(かす)んで　みえてゐる

# 永訣の秋

# ゆきてかへらぬ

——京都——

僕は此の世の果てにゐた。陽は温暖に降り洒（そそ）ぎ、
風は花々揺（ゆす）つてゐた。

木橋の、埃りは終日、沈黙し、ポストは終日赫々（あかあか）と、風車を付けた乳母車（うばぐるま）、いつも街上に停（とま）つてゐた。

棲む人達は子供等は、街上に見えず、僕に一人の縁者（みより）なく、風信機（かざみ）の上の空の色、時々見るのが仕事であつた。

さりとて退屈してもゐず、空気の中には蜜があり、物体ではないその蜜は、常住食すに適してゐた。

煙草くらゐは喫つてもみたが、それとて匂ひを好んだばかり。おまけに僕としたことが、戸外でしか吹かさなかつた。

さてわが親しき所有品（もちもの）は、タオル一本。枕は持つてゐたとはいへ、布団（ふとん）ときたらば影だになく、歯刷子（はぶらし）くらゐは持つてもゐたが、たつた一冊ある本は、中に何も書いてはなく、時々手にとりその目方、たのしむだけのものだつた。

女たちは、げに慕はしいのではあつたが、一度とて、会ひに行かうと思はなかつた。夢みるだけで沢山だつた。

名状しがたい何物かゞ、たえず僕をば促進し、目的もない僕ながら、希望は胸に高鳴つてゐた。

＊

＊　＊

林の中には、世にも不思議な公園があつて、不気味な程にもにこやかな、女や子供、男達散歩してゐて、僕に分らぬ言語を話し、僕に分らぬ感情を、表情してゐた。

さてその空には銀色に、蜘蛛（くも）の巣が光り輝いてゐた。

## 一つのメルヘン

秋の夜は、はるかの彼方（かなた）に、
小石ばかりの、河原があつて、
それに陽は、さらさらと
さらさらと射してゐるのでありました。

陽といつても、まるで硅石（けいせき）か何かのやうで、
非常な個体の粉末のやうで、
さればこそ、さらさらと
かすかな音を立ててもゐるのでした。

さて小石の上に、今しも一つの蝶がとまり、
淡い、それでゐてくつきりとした
影を落としてゐるのでした。

やがてその蝶がみえなくなると、いつのまにか、
今迄流れてもゐなかつた川床に、水は

さらさらと、さらさらと流れてゐるのでありました……

# 幻影

私の頭の中には、いつの頃からか、
薄命さうなピエロがひとり棲んでゐて、
それは、紗の服なんかを着込んで、
そして、月光を浴びてゐるのでした。

ともすると、　弱々しげな手付をして、
しきりと　手真似をするのでしたが、
その意味が、　つひぞ通じたためしはなく、
あわれげな　思ひをさせるばつかりでした。

手真似につれては、　脣(くち)も動かしてゐるのでしたが、
古い影絵でも見てゐるやう――
音はちつともしないのですし、
何を云つてるのかは　分りませんでした。

しろじろと身に月光を浴び、

あやしくもあかるい霧の中で、
かすかな姿態をゆるやかに動かしながら、
眼付ばかりはどこまでも、やさしさうなのでした。

## あばずれ女の亭主が歌つた

おまへはおれを愛してる、一度とて
おれを憎んだためしはない。
おれもおまへを愛してる。前世から
さだまつていることのやう。

そして二人の魂は、不識(しらず)に温和に愛し合ふ
もう長年の習慣だ。

それなのにまた二人には、
ひどく浮気な心があつて、

いちばん自然な愛の気持を、
時にうるさく思ふのだ。

佳い香水のかをりより、
病院の、あはい匂ひに慕ひよる。

そこでいちばん親しい二人が、
時にいちばん憎みあふ。
そしてあとでは得態(えたい)の知れない
悔の気持に浸るのだ。
あゝ、二人には浮気があつて、
それが真実(ほんと)を見えなくしちまふ。
佳い香水のかをりより、

病院の、あはい匂ひに慕ひよる。

## 言葉なき歌

あれはとほいい処にあるのだけれど
おれは此処（ここ）で待つてゐなくてはならない
此処は空気もかすかで蒼（あを）く
葱（ねぎ）の根のやうに仄（ほの）かに淡（あは）い

決して急いではならない
此処で十分待つてゐなければならない
処女（むすめ）の眼（め）のやうに遥かを見遣（みや）つてはならない
たしかに此処で待つてゐればよい

それにしてもあれはとほいい彼方（かなた）で夕陽にけぶつてゐた
号笛（フイトル）の音（ね）のやうに太くて繊弱だつた
けれどもその方へ駆け出してはならない
たしかに此処で待つてゐなければならない

さうすればそのうち喘(あへ)ぎも平静に復し
たしかにあすこまでゆけるに違ひない
しかしあれは煙突の煙のやうに
とほくとほく　いつまでも茜(あかね)の空にたなびいて
ゐた

# 月夜の浜辺

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちてゐた。

それを拾つて、役立てようと
僕は思つたわけでもないが

なぜだかそれを捨てるに忍びず
僕はそれを、袂（たもと）に入れた。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちてゐた。

それを拾つて、役立てようと
僕は思つたわけでもないが
　月に向つてそれは抛（はふ）れず
　浪に向つてそれは抛れず
僕はそれを、袂に入れた。

月夜の晩に、拾つたボタンは
指先に沁み、心に沁みた。
月夜の晩に、拾つたボタンは
どうしてそれが、捨てられようか？

また来ん春……

また来ん春と人は云ふ
しかし私は辛いのだ
春が来たつて何になろ
あの子が返つて来るぢやない

おもへば今年の五月には
おまへを抱いて動物園
象を見ても猫（にやぁ）といひ
鳥を見ても猫（にやぁ）だつた

最後に見せた鹿だけは
角によつぽど惹かれてか
何とも云はず　眺めてた

ほんにおまへもあの時は
此の世の光のたゞ中に

立つて眺めてゐたつけが……

## 月の光　その一

月の光が照つてゐた
月の光が照つてゐた

お庭の隅の草叢（くさむら）に
隠れてゐるのは死んだ児だ

月の光が照つてゐた
月の光が照つてゐた

おや、チルシスとアマントが
芝生の上に出て来てる

ギタアを持つては来てゐるが
おつぽり出してあるばかり

月の光が照つてゐた

月の光が照つてゐた

# 月の光　その二

おゝチルシスとアマントが
庭に出て来て遊んでる
ほんに今夜は春の宵（よひ）
なまあつたかい靄（もや）もある

月の光に照らされて
庭のベンチの上にゐる

ギタアがそばにはあるけれど
いつかう弾き出しさうもない

芝生のむかふは森でして
とても黒々してゐます

おゝチルシスとアマントが

こそこそ話してゐる間
森の中では死んだ子が
螢のやうに蹲(しやが)んでる

# 村の時計

村の大きな時計は、
ひねもす動いてゐた
その字板のペンキは
もう艶（つや）が消えてゐた

近寄つてみると、
小さなひびが沢山にあるのだつた
それで夕陽が当つてさへが、
おとなしい色をしてゐた

時を打つ前には、
ぜいぜいと鳴つた

字板が鳴るのか中の機械が鳴るのか

# 僕にも誰にも分らなかつた

# 或る男の肖像

## 1

洋行帰りのその洒落者(しゃれもの)は、

齢（とし）をとつても髪に緑の油をつけてた。

夜毎喫茶店にあらはれて、
其処（そこ）の主人と話してゐる様（さま）はあはれげであつた。
死んだと聞いてはいつそうあはれであつた。

2

——幻滅は鋼(はがね)のいろ。

髪毛の艶(つや)と、ラムプの金との夕まぐれ
庭に向つて、開け放たれた戸口から、
彼は戸外に出て行つた。

剃りたての、頸条(うなじ)も手頸(てくび)も
どこもかしこもそはそはと、
寒かつた。

開け放たれた戸口から
悔恨は、風と一緒に容赦なく

吹込んでゐた。

読書も、しむみりした恋も、
あたたかいお茶も黄昏（たそがれ）の空とともに
風とともにもう其処にはなかつた。

## 3

彼女は

壁の中へ這入(はひ)つてしまつた。
それで彼は独り、
部屋で卓子(テーブル)を拭いてゐた。

## 冬の長門峡

長門峡に、水は流れてありにけり。
寒い寒い日なりき。

われは料亭にありぬ。
酒酌(く)みてありぬ。

われのほか別に、
客とてもなかりけり。

水は、恰（あたか）も魂あるものの如く、
流れ流れてありにけり。

やがても密柑（みかん）の如き夕陽、
欄干（らんかん）にこぼれたり。

ああ！　――そのやうな時もありき、

寒い寒い　日なりき。

## 米子

二十八歳のその処女(むすめ)は、
肺病やみで、腓(ひ)は細かつた。
ポプラのやうに、人も通らぬ
歩道に沿つて、立つてゐた。

処女（むすめ）の名前は、米子と云つた。
夏には、顔が、汚れてみえたが、
冬だの秋には、きれいであつた。
——かぼそい声をしてをつた。

二十八歳のその処女（むすめ）は、
お嫁に行けば、その病気は
癒（なほ）るかに思はれた。と、さう思ひながら
私はたびたび処女（むすめ）をみた……

しかし一度も、さうと口には出さなかつた。

別に、云ひ出しにくいからといふのでもない
云つて却（かへ）つて、落胆させてはと思つたからでもな
い、

なぜかしら、云はずじまひであつたのだ。

二十八歳のその処女（むすめ）は、
歩道に沿つて立つてゐた、
雨あがりの午後、ポプラのやうに。
——かぼそい声をもう一度、聞いてみたいと思ふ
のだ……

## 正午

### 丸ビル風景

あゝ十二時のサイレンだ、サイレンだサイレンだ
ぞろぞろぞろぞろ出てくるわ、出てくるわ出てく
るわ

月給取の午休み、ぷらりぷらりと手を振つて
あとからあとからから出てくるわ、出てくるわ出てく
るわ
大きなビルの真ッ黒い、小ッちやな小ッちやな出
入口
空はひろびろ薄曇り、薄曇り、埃りも少々立つて
ゐる
ひよんな眼付で見上げても、眼を落としても……
なんのおのれが桜かな、桜かな桜かな
あゝ十二時のサイレンだ、サイレンだサイレンだ
ぞろぞろぞろぞろ出てくるわ、出てくるわ出てく

るわ
大きなビルの真ッ黒い、　小ッちやな小ッちやな出
入口
空吹く風にサイレンは、　響き響きて消えてゆくか
な

春日狂想

1

愛するものが死んだ時には、

自殺しなけあなりません。

愛するものが死んだ時には、
それより他に、方法がない。

けれどもそれでも、業（ごふ）（？）が深くて、
なほもながらふこととなつたら、

奉仕の気持に、なることなんです。
奉仕の気持に、なることなんです。

愛するものは、死んだのですから、
たしかにそれは、死んだのですから、
もはやどうにも、ならぬのですから、
そのもののために、そのもののために、
奉仕の気持に、ならなけあならない。
奉仕の気持に、ならなけあならない。

奉仕の気持になりはなつたが、
さて格別の、ことも出来ない。

そこで以前(せん)より、本なら熟読。
そこで以前より、人には丁寧。

テムポ正しき散歩をなして
麦稈真田(ばくかんさなだ)を敬虔(けいけん)に編み——

まるでこれでは、玩具（おもちゃ）の兵隊、
まるでこれでは、毎日、日曜。

神社の日向を、ゆるゆる歩み、
知人に遇（あ）へば、につこり致し、

飴売爺々（あめうりぢぢい）と、仲よしになり、
鳩に豆なぞ、パラパラ撒いて、

まぶしくなつたら、日蔭に這入（はひ）り、
そこで地面や草木を見直す。

苔はまことに、ひんやりいたし、
いはうやうなき、今日の麗日。

参詣人等もぞろぞろ歩き、
わたしは、なんにも腹が立たない。

《まことに人生、一瞬の夢、
ゴム風船の、美しさかな。》

空に昇つて、光つて、消えて——

やあ、　今日は、　御機嫌いかが。
久しぶりだね、　その後どうです。
そこらの何処（どこ）かで、　お茶でも飲みましよ。
勇んで茶店に這入（はひ）りはすれど、
ところで話は、　とかくないもの。
煙草なんぞを、　くさくさ吹かし、
名状しがたい覚悟をなして、――

戸外（そと）はまことに賑やかなこと！
――ではまたそのうち、奥さんによろしく、

外国（あつち）に行つたら、たよりを下さい。
あんまりお酒は、飲まんがいいよ。

馬車も通れば、電車も通る。
まことに人生、花嫁御寮。

まぶしく、美（は）しく、はた俯（うつむ）いて、
話をさせたら、でもうんざりか？

それでも心をポーッとさせる、
まことに、人生、花嫁御寮。

3

ではみなさん、
喜び過ぎず悲しみ過ぎず、
テムポ正しく、握手をしませう。

つまり、我等に欠けてるものは、
実直なんぞと、心得まして。

ハイ、ではみなさん、ハイ、御一緒に――
テムポ正しく、握手をしませう。

# 蛙声

天は地を蓋（おほ）ひ、
そして、地には偶々（たまたま）池がある。
その池で今夜一と夜さ蛙は鳴く……
——あれは、何を鳴いてるのであらう？

その声は、空より来り、
空へと去るのであらう？
天は地を蓋ひ、
そして蛙声は水面に走る。

よし此の地方が湿潤に過ぎるとしても、
疲れたる我等が心のためには、
柱は猶、余りに乾いたものと感はれ、

頭は重く、肩は凝るのだ。
さて、それなのに夜が来れば蛙は鳴き、

その声は水面に走つて暗雲に迫る。

# 後記

茲(ここ)に収めたのは、『山羊の歌』以後に発表したものの過半数である。作つたのは、最も古いのでは大正十四年のもの、最も新しいのでは昭和十二年のものがある。序(つい)でだから云ふが、『山羊の歌』には大正十三年春の作から昭和五年春迄のものを収めた。

詩を作りさへすればそれで詩生活といふことが出来れば、私の詩生活も既(すで)に二十三年を経た。もし詩を以て本職とする覚悟をした日からを詩生活と称すべきな

ら、十五年間の詩生活である。

　長いといへば長い、短いといへば短いその年月の間に、私の感じたこと考へたことは尠(すくな)くない。今その概略を述べてみようかと、一寸思つてみるだけでもゾッとする程だ。私は何にも、だから語らうとは思はない。たゞ私は、私の個性が詩に最も適することを、確実に確かめた日から詩を本職としたのであつたことだけを、ともかくも云つておきたい。

　私は今、此の詩集の原稿を纏め、友人小林秀雄に托し、東京十三年間の生活に別れて、郷里に引籠るのである。別に新しい計画があるのでもないが、いよいよ

詩生活に沈潜しようと思つてゐる。

扨（さて）、此の後どうなることか……それを思へば茫洋とする。

さらば東京！　おゝわが青春！

〔一九三七・九・二三〕

底本：「中原中也詩集」岩波文庫、岩波書店
1981（昭和56）年6月16日第1刷発行
1997（平成9）年12月5日第37刷発行
底本の親本：「中原中也全集　第1巻　詩　I」角川書店
1967（昭和42）年10月20日印刷発行
初出：「在りし日の歌」創元社
1938（昭和13）年4月
入力：浜野安紀子
校正：浜野　智
1999年2月17日公開

２０１０年11月2日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。